

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 日本語と韓国語における敬語の意味・機能に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鄭, 貞美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1852">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1852</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 博士論文審査の要旨

本論文は日本語と韓国語の敬語に関する対照研究である。日本語・韓国語対照研究は近年著しい進展を見せているが、そのなかでも敬語の対照研究には大きな意義が認められる。高度に複雑な敬語の構造を有する日本語と韓国語は、全体として類似性の高い敬語体系をもつが、その一方で見逃しえない相違点もある。

本論文では、日本語・韓国語の敬語に関する、日本語で書かれた研究文献と韓国語で書かれた研究文献とを、広範囲にかつ多角的に検討している。また、敬語が高度に言語化されている日本語と韓国語について、構造的に重要な位置にある用言、助詞類、名詞（人称詞、美化語）に分析を行き渡らせている。さらに、第 II 部に見られる美化語の分析は、日本語の敬語研究の豊かな成果を基盤とし、それを韓国語に及ぼした開拓的な研究として高く評価される。日本語の美化語は未だ確定的な規定を受けていないが、著者はそれを、話し手・聞き手が地位や上下関係に関わらず使用できるという「双方向性」と、使用されなくても非難される可能性が低いという「任意性」によって特徴づけ、そのようなとらえ方に基づいて、韓国語にも同類の美化語の存在を認めるべきであるとしている。この主張は、韓国語の敬語研究に対する大きな問題提起となる。

以上から、本論文は文化交流専攻の博士論文に求められる水準に十分到達しているものと判断される。

## 論文審査結果

本論文は序論（第 1 章）、第 I 部（第 2～5 章）、第 II 部（第 6～9 章）、結論（第 10 章）から成る。序論では本論文の目的、視点、分析方法について述べ、日韓両語を対照するための敬語の分類を行う。第 I 部では日本語と韓国語の助詞類、用言、人称詞に認められる敬語の意味・機能を分析し、第 II 部では名詞を中心に、日本語と韓国語の尊敬語と美化語にまたがる問題について論じている。結論では第 I 部と第 II 部の内容をまとめている。

第 2 章では、日本語と韓国語の敬語の概要を示しつつ、両言語の敬語に関する先行研究の成果を整理し、「敬語助詞」、韓国語の補助語幹 ‘-gess-’ と敬語との関係、日本語「あなた」と韓国語「当身 (dangsin)」等の問題を提示している。

第 3 章では、韓国語 ‘-kke’ と日本語「に (は/も)」とを対照し、敬語助詞とされる韓国語 ‘-kke’ と、日本語「に」のいわゆる主格用法との類似点と相違点を明らかにしている。その種の日本語「に」が敬語的とされる、文法上の根拠を示すことが望ましかった（本来「が」でマークされるべきものが「に」でマークされている）。

第 4 章では、従来諸説あった韓国語 ‘-gess-’ と敬語との関係について論じ、‘-gess-’ は尊敬あるいは謙譲の意味を強化するものであるとしている。日本語との対照において考えるなら、敬語と関わりのない場合も含めた韓国語 ‘-gess-’ の機能を、統一的に説明できたのではないと思われる（‘-gess-’ は概言といった叙法を表すものかもしれない）。

第 5 章では、日本語「あなた」と韓国語「当身」とを対照し、「等称」「下称」「敬称」に分けてそれぞれの用法を分析している。試みとして興味深く、方法を工夫すればより明快な結論が得られた可能性がある。

第 6 章では、日本語の美化語についての先行研究を検討したうえで、美化語を「品格」、「双方向性」（話し手と聞き手がともに使える）、「任意性」（使わない場合にペナルティが

あるとは限らない) によって定義している。これは日本語と韓国語の両方に適用される重要な提言である。ただ、美化語と尊敬語、丁寧語との関係にはなお問題が残り、また、「双方向性」の本質についても、更なる追究が可能であろう(名詞なら指示対象の帰属先が、動詞なら行為者や動作の対象が特定しなくてもよい)。

第7章では、日本語の接頭辞「御(み)-」を取り上げ、「み-」と関係の深い「おん-」「ぎょ-」「お-」「ご-」と照合しつつ、「み-」の意味の史的变化を追っている。尊敬語としての「み-」は宗教的場面以外では生産性を失って語彙化し、その結果、「み-」の前に「お-」を重ねた「おみ-」は美化語になったと述べる(もっとも、神仏〈皇室含む〉に関わらない「み-」は元来例外的なようである)。

第8章では、韓国語 'malsseum' と「薬酒(yakjju)」は第6章の定義に適い、美化語の要素をもつと主張している。これまで韓国語には美化語はないとされてきたが、日本語との対照が韓国語研究においてどのように活かされるか、期待される場所である。

第9章では、乳幼児期における「乳児語」、「乳幼児語」、「幼児語」を明確に区分し、それぞれの過程における言語の特徴や、成人の美化語につながらない一種の美化語の存在を指摘している。

日韓敬語の対照は緒に就いたばかりといえる。今後、対照研究によって初めて解明される現象を見出していくためには、さらに方法を磨く必要がある。

#### 最終試験結果(試験実施2014年8月4日)

最終試験には主査を含む4名の審査委員全員が出席し、著者による論文の概要説明に続いて、著者との間で質疑応答を行なった。審査委員からは様々な角度から質問・意見が寄せられ、著者はそれらに対して誠実に回答した。特に、韓国語に通じた審査委員が加わったために、韓国語についての詳細な議論が可能になったことはたいへん有益であった。

敬語研究に統語論的な視点を持ち込むことは、従来多くない方法で将来性があると見られる。ただし、その方法を有効にし、日韓敬語の共通点と相違点を体系的に示すためには、日韓両言語の文法体系についての深い理解が求められる。また、本論文のように多岐にわたる現象を扱う方法にとっては、各分野における先行研究を丁寧に調査することが不可欠である。概ね以上のような意見が審査委員から述べられ、この対照言語研究の今後の課題、望ましい方向性が確認された。